

〈展示報告〉西の丸御蔵城宝館 プレオープン特別企画  
「鯨展」—今だから 鯨（さち）は舞いおり あなたによりそう

朝日 美砂子

会期 令和3年4月16日(金)～5月9日(日)  
出品件数 33件

【挨拶バナー】

ここ西の丸は、尾張藩の米蔵が立ち並ぶ特別な曲輪でした。米蔵は現在取り壊されており、名古屋城の文化財を収蔵しつつ展示するにふさわしい立地として、新施設を建設するにいたしました。今年度秋の本格開館をめざし、現在整備を進めております。秋の本格開館に先立つ特別企画が、「鯨しゃち展」です。江戸時代、名古屋城では、天守だけでなく、主な櫓と門に鯨がありました。明治以降、それらは旧江戸城の銅鯨に替えられ、いくつかは第二次世界大戦の空襲に耐え現存しています。本展では、名古屋城に伝わる銅鯨を一堂に集めました。戦災をくぐり抜けた鯨は、今私たちに迫り来る禍の波を押し返し、幸でつつんでくれるかもしれません。

ルビ、解説等の一部を省略し、また改めた。以下同。

特記のない限り資料所蔵者は名古屋城総合事務所。

【テーマパネル】Ⅰ ここに鯨 そこに鯨

名古屋城の鯨は、大天守の金鯨だけではない。名古屋城は、徳川家康による慶長年間の創建以来、尾張徳川家の城であったが、明治維新後は陸軍が常駐し、さらに明治26年(1893)、離宮に裁定された。天皇の御宿泊所として、本丸を中心とする名古屋城北西部が宮内省に移管されたのである。ただし本丸以東は陸軍所轄であったため、明治43年(1910)、宮城(旧江戸城)の蓮池御門が天皇をお迎えする表門として名古屋城西南端に移設された。

当時宮城に残っていた櫓や門の銅鯨も同時に移され、西之丸の正門、本丸の表一之門、東一之門、小天守、東南・西南・東北各隅櫓、そして御深井丸の西北隅櫓に上げられた。すなわち、天皇の御料馬車が通る正門と表一之門、天皇御



寝所である本丸御殿を取り巻く隅櫓に、宮城の銅鯨が載り、その上に、尾張徳川家以来の大天守金鯨が君臨していたことになる。江戸から今にいたる歴史の渦を、名古屋城の銅鯨はかいくぐってきたのである。

〈作品解説〉1 旧国宝 名古屋城正門銅鯨

明暦3年(1657)10月 渡辺銅意正俊作 青銅製  
銘「明暦三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」

名古屋城正門に掲げられていた青銅鑄物製の鯨。もと江戸城の銅鯨で、江戸城が明暦大火(明暦3年正月)で焼けた後に鑄造され、二之丸の蓮池御門に掲げられていた。蓮池御門は、明治43年(1910)、当時離宮となっていた名古屋城に鯨とともに移築され、昭和5年(1930)、名古屋城正門として国宝に指定された。昭和20年5月、正門は空襲で焼失したが、この鯨一尾は痛ましく破損しつつも全焼は免れた。なお正門は昭和34年コンクリートで再建され、新規に作られた銅鯨が載せられた。

〈写真解説〉① 名古屋城正門銅鯨

ガラス乾板写真 昭和15～16年頃撮影

戦災で損壊する前の正門銅鯨を、真後ろから撮影する。今は欠落した蛇腹や鰭が、ガラス乾板ならではの微妙な陰影により写しだされている。

〈補助解説〉① 名古屋城のガラス乾板写真

名古屋城には、700枚以上のガラス乾板写真

が所蔵されている。多くは、昭和15年から16年にかけて、文部省宗教局保存課の監修のもと、東京から写真家を呼び撮影したもので、足場を組み建造物を四方から撮影している。撮影の成果品として同16年、カラー頁を含むコロタイプ印刷図録『国宝名古屋城図録』が出版された。昭和20年5月14日の名古屋空襲により、国宝建造物の大半は焼失したが、ガラス乾板は焼失を免れた。戦災で失われた国宝を写す貴重な画像群であり、特別史跡名古屋城の整備における基本資料となっている。

### 〈作品解説〉2 旧国宝 名古屋城表一之門銅鯨

銘「万治三年庚子二月吉日 御鑄物師銅意法橋  
同子渡辺近江大掾次」

「宮内省御用達 野田平吉 代人 田中嘉策」

万治3年(1660) 渡辺銅意正俊・正次作 青銅製

刻銘から、幕府鑄物師渡辺正俊・正次父子が万治3年に作った江戸城の銅鯨で、明治43年(1910)名古屋城(当時名古屋離宮)に移された事が知られる。表一之門は足場が組めなかったらしく、鯨の正対写真はないが、消去法によりこの銅鯨を表一之門鯨と推定した。正門の鯨に比べ表現力はわずかに劣るものの形はほぼ等しい。なお、西南・東南隅櫓の鯨は、同じような形ながら作風に差がある。東北隅櫓・東一之門の鯨は、構造が異なり様式も平板である。正門・表一之門は天皇が通る門であり、古く出来のよい鯨を掲げたのかもしれない。

〈補助解説〉① 口の奥に、焼け焦げた木材が見える。薄い鉄板やベルト状の鉄板もある。木材は屋根の棟の一部で、太い鉄ボルトで鯨を固定したと考えられる。明治43年の鯨移築時の部材であろう。表一之門は他建造物と同様昭和5年国宝に指定されており、この材木も旧国宝となる。生々しい空襲の記憶であり、鯨の構造を伝える貴重な情報でもある。

〈補助解説〉② 刻銘から、正門銅鯨は明暦3

年(1657)10月に銅意正俊(寛文2年・1662没)、表一之門銅鯨は正俊とその子正次が万治3年(1660)に作ったと知られる。また東京国立博物館所蔵の鯨には万治2年、皇居東御苑に現存する鯨には万治3年の銘がある。正次は、四代将軍家綱が万治2年に山王日枝神社(東京都千代田区赤坂)に奉納した灯籠(千代田区指定文化財)の作者。正俊が明暦3年に作った正門銅鯨と、正次が万治3年に作った表一之門銅鯨を比較すると、よく似てはいるが耳の形など細部で異なる。

### 〈作品解説〉3 旧国宝 名古屋城正門銅鯨 尾鯨

明暦3年(1657) 青銅製

銅鯨の尾の先。内部は空洞で、重さ4.5kg。消去法から、昭和20年の空襲で破損した正門銅鯨の尾と考えられる。

注記・小天守鯨鯨に訂正。朝日論文参照。

### 〈作品解説〉4 旧国宝 名古屋城表一之門銅鯨 腹鯨

万治3年(1660) 青銅製

付根から折れた腹鯨。青銅の固まりで、重さ9kg。表一之門銅鯨(2)の腹鯨跡と一致する。昭和20年、焼夷弾攻撃を受け門が燃え始めると、鯨は自重で落下し、このように接合部分で折れたのであろう。小規模の建物であったため、青銅が溶解する前に木材が燃え尽き、鎮火したと考えられる。

### 〈作品解説〉5 旧国宝 名古屋城東北隅櫓銅鯨

銘「明治四十三年三月自東京城移之」

江戸時代 青銅製

右半身・左半身に分かれた銅鯨2点。微妙に形が異なり、北と南の鯨と思われる。片方に刻銘があり、明治43年に東京城から名古屋離宮に移管されたものとわかる。どの建物に移されたかの記録はないが、古写真と比較し、東北隅櫓と推定した。明暦3年作の旧蓮池御門鯨とは構造が異なり、半身をそれぞれ鑄造し、屋根上で棟にボルト止めしたと考えられる。内側には

土が残っており、今後の分析に期待したい。

#### 〈補助写真〉② 名古屋城東北隅櫓銅鯨

ガラス乾板写真 昭和15～16年頃撮影

東北隅櫓の南側鯨を、東側から正対して撮影したガラス乾板写真。鯨に焦点を絞り遠景として大天守を写しこんだ美しい一枚である。

#### 〈作品解説〉6 名古屋城表一之門背面図

昭和実測図016 昭和

表一之門（南一之御門）は本丸大手門。瓦鯨があったが、明治43年宮内省により旧江戸城の銅鯨に交換された。本資料は背面（北側）の実測図面。

#### 〈作品解説〉7 名古屋城東北櫓東側姿図

昭和実測図136 昭和 ★本文省略

#### 〈補助解説〉② 名古屋城の昭和実測図

名古屋城には、拓本貼付も含め307枚の実測図が保存されている。昭和7年（1932）から、名古屋城保存管理調査委員会の監修と文部省国宝建造物調査課の高橋政雄・市川岩雄両技術員の指導により、国宝建造物調査が開始された。詳細に測量され、膨大な拓本や原寸図、野帳が作成されたが、戦局悪化により昭和17年中断した。昭和20年の焼夷弾攻撃により国宝建造物の大半は焼失したが、野帳類は焼失せず、昭和27年度実測図が完成した。ただしこの国宝調査は旧江戸城鯨を調査対象から外したらしく、鯨の詳細図はない。

#### 〈資料写真〉①「江戸御本丸西丸御櫓唐銅鑄物鴟吻絵図」部分 原資料東京都立中央図書館特別文庫室蔵

天保9年（1838）重要文化財 甲良家文書

幕府作事方大棟梁を勤めた甲良家が所持していた、鯨の変遷を描く巻物。巻頭に江戸城本丸西丸の櫓にあった鯨を描く。唐銅は青銅、鴟吻は鯨のこと。高4尺5寸（約130cm）という寸法は、江戸城から名古屋城正門や表一之門に移管された銅鯨とほぼ等しい。ぎざぎざに切れ込んだ眉もよく似ており、この形式の鯨が江戸城

で継承されたことを物語る。奥書から、天保9年3月に西丸御殿が全焼した直後、再建資料として作成されたと考えられる。

#### 〈資料写真〉②「御本丸御書院渡御櫓唐銅鑄物鴟吻」(部分) 原資料 東京都立中央図書館特別文庫室蔵

重要文化財 甲良家文書

江戸城書院渡櫓の銅鯨の図。「鯨一尾で80貫目。そのうち5%つまり4貫目（15kg）が鉛で、鉛の目減り分1割8分を考慮し4貫877目を混ぜる」旨の貼紙がある。80貫目は約300kg。この重量の銅鯨を名古屋城に運び櫓の上まであげたのである。当時の名古屋城鯨瓦の破損状況は明らかではないが、離宮として威儀を整えるための移管と考えられる。

#### 〈資料写真〉③江戸城旧大手門渡櫓鯨

渡邊銅意正俊作 青銅製 明暦3年（1657）

江戸城は、明治元年（1868）東京城と改称され（翌年皇城に改称）、明治天皇の住まいとなった。昭和20年4月の東京大空襲ではほぼ全焼したが、大手門渡櫓の鯨は一尾のみ現存し、東御苑枅形内に置かれている。「明暦三丁酉初冬銅意入 正俊作」という、江戸城蓮池御門から名古屋城に運ばれた正門銅鯨と同じ刻銘があり、明暦大火後の10月、銅意正俊によって作られた事がわかる。江戸城大手門鯨と名古屋城正門鯨は、出自と誕生日を同じくする双子なのである。

#### 〈資料写真〉④ 江戸城 銅鯨

渡邊銅意正俊・近江大掾正次作 万治2年（1659）

東京国立博物館蔵 画像提供 東京国立博物館資料館 陸軍から帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈されたという銅鯨。寄贈の経緯や江戸城のどの建物にあったかはわからない。背中に「萬治二己亥年五月 銅意法橋作 同子 渡辺近江大掾 源正次」の刻銘があり、名古屋城表一之門銅鯨が鑄造される1年前、同じく正俊・正次父子によって制作されたことがわかる。この陸

軍寄贈鯨と名古屋城表一之門鯨は兄弟なのである。

### 〈バナー〉 くらべてみよう鯨の顔

①西南隅櫓南鯨 ②西北隅櫓南鯨 ③東南隅櫓北鯨

令和3年2月22日ドローン撮影

### 〈作品解説〉8 名古屋城東南隅櫓西側姿図

昭和実測図 123 昭和

本丸の東南を守る東南隅櫓。外観二層内部三階で、戦災焼失をまぬがれ重要文化財に指定されている。昭和28年の修理報告書によれば、銅鯨に「明治四十三年三月自東京城移之」「宮内省御用達 野田平吉 代理人田中嘉策」の刻銘があり、旧江戸城銅鯨とわかる。今年2月に撮影したドローン画像により、正門等の鯨とはまったく異なる怪異な風貌が確認できた。

### 〈作品解説〉9 名古屋城西南隅櫓南側姿図

昭和実測図 152 昭和

重要文化財西南隅櫓は、本丸の西南に建つ。昭和20年の空襲に耐えて現存する。平成23年～26年の修理により、北鯨に「明治四十三年三月自東京城移之」の銘があり、南鯨には加えて「御用達 野田平吉」とあることが確認された。正門鯨に比べずんぐりし、東南隅櫓の鯨と同形式と見なされる。

### 〈作品解説〉10 名古屋城西北隅櫓横断面図

昭和実測図 168 昭和

重要文化財西北隅櫓は、名古屋城西北の御深井丸最奥にある三階建櫓で、清州城天守を移したと伝わる別格の櫓。昭和37年～39年に修理された。鯨には表一之門鯨と同じ銘があり、様式的に東南・西南隅櫓の鯨より先行する。西北隅櫓には江戸城鯨のうち古格ある鯨を移した可能性がある。

### 【テーマパネル】Ⅱ もっと鯨

名古屋城の鯨は、大天守の金鯨や江戸城の銅鯨だけではなかった。江戸時代、城の各郭を鯨が守っていた。ここ西之丸西北隅の月見櫓、南

西隅の未申櫓の二階屋根には、瓦鯨があった。西之丸北の御深井丸には、現存する西北隅櫓の他二階建ての丑寅御櫓があり、鯨もいたが、維新直後に撤去された。藩主が住む二之丸の主要な櫓と門にはやはり鯨がいた。南に広がる三之丸でも、本町御門など主な門で鯨が睨みをきかせていた。江戸期の絵図には、郭を護る多くの鯨が描きこまれている。しかしながら、明治以降の破却と戦火により、尾張藩が作り城を護っていた鯨はことごとく失われた。

### 〈作品解説〉11 名古屋城図 江戸時代後期写

名古屋城主要部の絵図。城修理にたずさわった高木家に伝来した。「慶長十九年二月ヨリ十二月廿三日迄尾張名護屋御城御普請」の墨書がある。天守や本丸御殿の他、元和年間に造営された二之丸御殿も描かれている。隅櫓と主な門には鯨が見え、多くの鯨が城を護っていたことが確認できる。

### 【テーマパネル】Ⅲ これぞ金鯨

そもそも天守に金鯨を戴くのは、名古屋城だけではなくではなかった。信長が建てた安土城には金箔を貼った鯨瓦がおり、秀吉も金の鯨を踏襲したと考えられる。江戸城、大阪城など江戸初期に徳川将軍家が造営した主要な城郭には金の鯨が飾られ、それらの鯨は、名古屋城と同じような形状であったと考えられる。しかし、江戸城の天守は明暦3年の大火で全焼し、大阪城の天守も寛文5年(1665)炎上した。いずれも再建されず、江戸後期には、金鯨は名古屋城大天守のみとなった。よって金城が名古屋城の美称となったのである。この美称を書名にした『金城温古録』は、天守金鯨に多くの頁を割いており、金鯨は尾張の誇りであった。

### 〈作品解説〉12・13・14 金城温古録

御深井丸編八 二之丸編六 三之丸編四 御天守編六  
名古屋市蓬左文庫蔵 ★本文省略

## 〈作品解説〉16 御天守鯨木地仕口寸尺之図

文政10年(1827)

天守金鯨は三回改鑄され、鱗が溶かされ金に戻され、藩の財政再建に回された。本資料は、文政11年の改鑄時作事方が作成した調書。鯨の芯は榧や桧の寄木を鉛で包み、漆を塗り防腐措置とし、さらに銅で包んでいた。鱗は、厚1.5mmの分厚い金板を銅板で裏打ちし、銅釘で芯木に打ちつけ、白目は赤銅に銀をかぶせていた。

### 【テーマパネル】Ⅳ 名古屋離宮

慶応3年(1867)の王政復古の大号令を受け、明治4年、廃藩置県が実施された。日本中の城が兵部省管轄となり、明治5年からは陸軍省所轄となった。名古屋城には東京鎮台第三分営(名古屋鎮台)が設置され、ここ西之丸の米蔵六棟も六番御蔵以外廃され、武器庫や営倉が林立していった。明治6年のいわゆる廃城令において廃城に仕分けされた城は破却されたが、名古屋城は存城となり陸軍省管理下に留め置かれ、明治12年、「屈指の名城」として永久保存すべきことが天皇詔として発せられた。明治26年、本丸一帯は名古屋離宮となり、天皇皇后行幸啓の場となった。宮内省は本丸を整備し金鯨を調査するなど名古屋城の保全を進めたが、天皇は陸海軍の大元帥でもあり、陸軍大演習時には名古屋城は大本営として用いられた。

### 〈資料写真〉「名古屋城金鷲尾損所調査図 明治一三年七月調査」(部分) 宮内庁宮内公文書館蔵

金鯨の破損状況を示す図巻。宮内省内匠寮作成として宮内庁に伝わるが、陸軍が作成し宮内省に渡した可能性が高い。明治12年名古屋城が永久保存とされたため、現況を調査したと考えられる。

### 資料写真「名古屋離宮仮賢所工事、紫宸殿工事(写真帳)」 昭和3年 宮内庁宮内公文書館所蔵

昭和天皇の御大典に先立ち、昭和3年、宮中

三殿の一つ仮賢所が御深井丸に設営された。

### 資料写真「昭和二年陸軍特別大演習並地方行幸愛知県記録」 昭和4年 画像提供国立国会図書館

昭和2年11月の愛知県陸軍大演習の記録写真。軍服姿の若き昭和天皇が、本丸御殿表書院南廊下に直立され、舞良戸に掲示された学徒の書画に見入る。本丸御殿内唯一の天皇御影である。

### 【テーマパネル】Ⅴ 名城 炎上

昭和5年(1930)、名古屋城は名古屋市に下賜され、同時に国宝に指定された。城郭としての国宝第一号であり、名古屋市は国宝建造物の調査・撮影を開始した。建造物を実測し細部スケッチや拓本を制作し、ガラス乾板を用いて各方向から撮影するという大規模な事業であったが、第二次世界大戦が勃発すると、大天守という高層建築を擁する広大な名古屋城は、絶好の空爆指標となった。昭和20年5月14日、名古屋城上空で、連合軍の焼夷弾爆撃がはじまった。目標は名古屋北部市街地、出撃機数524機、攻撃回数275回。高度4860～6150mから2515トンの焼夷弾が投下され、目標上空滞空時間は午前8時5分から9時25分。容赦なく投下された大量の焼夷弾により、名古屋城は国宝建造物の大部分を失った。残ったのは、隅櫓三棟と門三棟、そして明治初期に弾薬庫として建てられた乃木倉庫。江戸城から移設された銅鯨の内、東南・西南・西北の3隅櫓にあったものは、建物とともに生き残った。

### 〈資料写真〉名古屋城・名古屋市役所

上：1932年頃撮影。連合軍が空爆目標作成のため使用したと思われ、「城の下はカムフラージュか」の注記がある。下：1938年頃撮影。「市役所は名古屋城東南角のランドマーク」の注記がある。市役所の時計塔は名古屋城同様よく目立った。

### 〈資料写真〉No90-20(名古屋地方)1944年

撮影。「NAGOYA CASTLE」(名古屋城)、「SHONAI RIVER」(庄内川)のほか、熱田区・東区などの軍需工場を明示している。



Joint Target Group Air Target Analyses, 1944-1945, USSBS.NARA. 画像提供国立国会図書館

### 〈資料写真〉石垣のみ残る天守

GHQの文民スタッフとして来日したロバート・モージャー氏(Robert V. Mosier)が、昭和21年(1946)秋頃名古屋城で撮影したカラーズライド。画像提供 国立国会図書館デジタルコレクション「モージャー氏撮影写真資料」

### 〈作品解説〉17 集束焼夷弾弾頭

昭和20年5月14日投下

平成22年からの本丸御殿復元工事ともなう発掘調査により、本丸御殿跡から出土した、E46型集束焼夷弾の弾頭部(ノーズブロック)。35kgの鉄の重りで、B29型爆撃機から投下され、内蔵するM69焼夷弾38発が外れ落下する。焼夷弾が地上に衝突すると、内部のナパーム油が着火し火災を引き起こす。木造家屋が密集する日本の町を効率的に焼き払うため米軍が開発した、鉄と油の塊であった。

### 〈作品解説〉18 焼夷弾 昭和20年5月14日投下

大天守東側石垣の直下に埋もれていたM69焼夷弾。平成30年の発掘調査で出土した。大天守を襲った焼夷弾そのものである。M69焼



夷弾は、本来長さ約50cm。この焼夷弾は半壊しており、火災のすさまじさを物語る。昭和20年5月14日朝、B29から投下されたこれらの焼夷弾が天守にふりそそぎ、築城以来輝いていた金鯨を天守もろとも消滅させたのである。

### 〈作品解説〉19 旧国宝 焼損木材 昭和20年被災

昭和20年5月に焼失した国宝建造物は、大小天守、東北隅櫓、正門、表一之門、東一之門、東二之門、不明門、本丸御殿玄関、表書院など27棟。この焼け焦げた木材は、焼け跡からの収拾品として名古屋城に伝えられてきた。どの建造物だったのか、今となってはわからない。

### 〈作品解説〉20 旧国宝 金鯨鱗 江戸時代

戦局の悪化を受け地中に埋めるべく、南方の鯨が途中まで降ろされ、北方の鯨はまだ屋根上にあった昭和20年5月14日朝、焼夷弾により天守は猛火に包まれた。天守とともに鯨は溶解し、焼け跡には鯨の金が固まりとして残ったという。それとは別に、空襲前から外れていた鱗、焼失後に発見された鱗、進駐軍から隠した鱗など21点が、名古屋城に伝えられ、金庫に入れて保管されてきた。

### 【テーマパネル】VI 金 流転

8月15日の敗戦後、金塊となっていた金鯨は、昭和21年進駐軍に接收され、昭和34年の天守閣復興にも戻らなかった。昭和42年、6,664.4gの混合地金が大蔵省経由で名古屋市に返還された。市は一部の金で市旗の冠頭を作成し、それ以外は翌年純金の茶釜として再生させた。茶

道が日常に深く根付く名古屋ならではの選択であった。

〈作品解説〉21 市旗冠頭 ★以下本文等省略

〈作品解説〉22 市旗冠頭木型

〈作品解説〉23 丸八文様鯨環付真形釜

〈作品解説〉24 丸八文様鯨環付真形釜原型

〈作品解説〉25 丸八文様常環付真形釜

【テーマパネル】そして鯨（さち）はここにいる

慶長期に作られ、改鑄されつつも昭和20年まで存続した金鯨。その勇姿は、戦災以前に制作された野帳やガラス乾板写真にとどめられていた。それらを根拠に、昭和34年（1959）、鉄筋鉄骨コンクリートで昭和天守閣が外観復元され、屋根には新たに作られた金鯨が掲げられた。昭和金鯨は、北方（雄）が総重量1272kg、南方（雌）が1215kg。そのうち金は、雄が44.69kg、雌が43.39kg。鱗は厚さ1mmの銅板の表裏に銀メッキし、厚さ0.15mmの18金の板を貼り、表面にメラミン樹脂を塗装した。一枚ずつ番号を振り、金板貼りの銅製ビスで躯体に固定されている。加工は大阪造幣局。

昭和金鯨は、現在天守閣から降り、栄のミツコシマエヒロバスにいる。昭和59年の名古屋城博、平成17年の新世紀・名古屋城博における名古屋城パビリオンでの公開をのぞき、昭和34年から60年以上屋根の上でいたため、傷もある。名古屋城では、昭和金鯨を点検修理した上で、再び天守閣にあげる予定である。

〈作品解説〉26 野帳 昭和前期

戦前の国宝建造物調査時の鉛筆書きノート。終戦後、木箱に納められて名古屋城で保存され、昭和金鯨の復元において重要な役割を果たした。

〈作品解説〉27 名古屋城天守南側鯨詳細図

〈作品解説〉28 名古屋城天守北側鯨詳細図

昭和実測図 101 102

北側鯨は南側鯨より顔が小さく胴体も細長い。東洋文庫蔵『金城温古録』草稿本に、北を



雄、南を雌と呼ぶとの奥村得義の注記があり、この俗称は形の相違によるのかもしれない。

〈作品解説〉29 ガラス乾板 大天守北方鯨

調査用の足場が写りこむ。今年春、金鯨をヘリコプターで降ろすにあたり鉄枠が組まれたが、足場は熟練した職人四人が手作業で組み立てた。

〈作品解説〉30 ガラス乾板 大天守北方鯨

戦前の大天守金鯨。鯨には鳥よけの金網がかぶせられている。今も、鯨に陽があたると鳥が集まり乱舞する。天守屋根上での作業の難しさと鳥が金を好むことは、昔と今で変わりはない。

〈作品解説〉31 金鯨模型 大谷相模大塚寄贈

〈作品解説〉32 ガラス乾板 天然記念物櫃の木

櫃の木は、築城以前からここ西之丸にあったとされ、昭和7年天然記念物に指定された。空襲時、焼夷弾に直撃され、主幹5本の内3本が炎上した。

〈作品解説〉33 ガラス乾板 西之丸絵画館

西之丸は、江戸期は米蔵構と呼ばれ、米蔵六棟が並んでいた。明治以降は陸軍の倉庫エリアとなり、離宮期はバックヤードになったらしい。昭和26年、鉄筋鉄骨コンクリート造で平屋建ての絵画館（のち西の丸展示館）が新築され、重要文化財本丸御殿障壁画を展示するなど、名古屋における文化啓蒙の拠点となった。この由緒ある地に、戦火をくぐり抜け名古屋城に今ある数々の文化財を保存し公開する施設として、西の丸御蔵城宝館が誕生した。